



## 酒の愉しみ

本 多 久 吉

「白玉の歯にしみとほる秋の夜の、酒はしづかに飲むべきかりけり」の秋水の歌も懐かしい此の頃、此の国の首都東京のど真中、銀座では大トラが横行し、狼藉の限りをつくしている。(朝日新聞)同じ頃デンマークでは戦後10年にしてやつと酒類が自由に飲める法律が公布され、さぞかし左党連は有頂天になつて大騒ぎを演ずると思いきや、市内は極めて平穩、「もう大分いけましたね」とバーテンに言われると、客はおとなしく御輿を上げて帰つた。(同紙)子供と大人の世界の違い。大トラになる程多量に飲んで戴くのだから、酒造りを生業なりいしにしている筆者にとつては有難いと思わねば冥加につきる。それでも此の国の人達の酒の飲みつ振りは情けないと沁々思う。銀座裏に限らず、全国至るところの繁華街の裏通りは真夜中ともなれば大トラ、小トラがうろついている。それどころか白昼、春の桜、秋の紅葉の観賞の道端に大の字になつたトラ属をみかける。酔余の心なき戯れで、あたら 栄職を棒に振つた此の国の大蔵大臣。3,000人もの采賚を相手に盃を重ね、その後で一大演説をやつてのける隣の国の総理大臣。異国人達が「礼儀の正しい国」と賞める此の国の「酒飲み」の教養は12歳の生長かも知れぬ。筆者は暇にまかせて、或る時、此の国に棲息する大トラ、小トラ属の實在数を推定してみた。全国の飲酒人口2,000万人。「彼奴は飲み助だ」と目されるものが100人中1人と抑えて20万人。此の中大トラ、小トラになる可能性のあるものが多く見積つて10人中2人としても4万人とはおらぬことになる。大トラ小トラの醜態は目に余るが全体としては大した数ではあるまい。

一体酒はどの位飲めるものだろうか。「サントリーの角樽1本あげちやつたよ」とケロリとしている超弩級もたまには出会う。この級だと清酒なら1升以上の酒

量。中学1年生から酒を飲み初め、満50歳で飲酒50石の記念祝賀会を盛大にやつた大先輩がある。1日平均4合弱。最盛期は1日平均1升とみねば計算が合わぬ。此の先輩などは超弩級の最右翼だろう。20万人の「奴は飲み助だ」級の飲酒量はどの辺にあるのかは推定し難いが、筆者の体験から先ず晩酌はハイボール(ダブル)1コップ、清酒なら1合、或はビール1本。月に4~5回飲み友達と一杯やるとか、宴席に出るとして、此の場合、ハイボールなら7~8杯、清酒なら5~6合は軽くやろだろう。これで年間平均1日2合弱。最も穩健なクラスの酒飲みの標準ではなからうか。だとすると「酒飲み」或は「飲み助」級の酒量は清酒換算1日平均3合と仮定しても大きな間違いはなからう。これで計算すると所謂「飲み助」級の飲酒総量は年間清酒換算20万石。結局年間酒類総生産量624万石(清酒換算)の3%にすぎない。これでは所謂「飲み助」級の愛酒家が火トラ、小トラになるのも辞せずと今の倍量を飲んで貰つても大した増加は望めない。そこで筆者は秘かに夢みる。

若し全国の組織労働者が日々の労働の後で、「労務者の酒場」だとか家庭の食卓で酒の肴はなくとも、1杯のハイボールか、ウキスキーウオター(冷水でウキスキーを3~4倍に割つたもの)女子労務者ならば食前にポートワイン(甘い葡萄酒)の1杯でもひつかけて貰うたならばどんなに嬉しいことだろうし、明日の労働の再生産に役立つことだろう。此の場合生れつき酒の飲めない人達が半数あるとして、計算してみると、全洋酒業者がフル生産しても2年間分。20万人の飲み助達が4年かからねば飲みきれぬ程の大量となる。(組織労務者男子4,484千人、女子1,358千人とし清酒換算約70万石)

独乙の学生がビールを愛し、フランスの婦女子までが葡萄酒をたしなみ、ソ聯の労働者がウオトカ(最近葡萄葡萄酒が多くなつた由)をひつかける。そしてこれ等の国民1人当りの飲酒量は就れも此の国の数倍。酒が正しく嬉しいものとして此の国の人達に愛せらるるならば、醸造業はもつともつと繁昌するだろうし、これに連なる農工業も繁昌することだろう。そして主食を原料とする清酒が他の酒類に替る(左程六ヶ敷いことではない)と広い意味で栄養(エネルギー)給源としての酒の恒打も打ち出されるだろう。

「酒の愉しみ」の話に入るまでに既に紙数を費やしてしまつた。ここでは飲み助と言われる程の豪のものが他人様に迷惑をかけたり、自分自身を傷ふ程に、飲んで戴くより、此の国の大衆がほんの少し宛でも酒の愉しみを知つて愛飲される方が此の国の醸造産業のためにも、どれ程有難いかを知つて戴いて本稿を終う。

(株式会社寿屋常務取締役)